

それが全てだ。僕が本気の十分の一の力で、彼の拳を押さえ込めるにしたって。降参の身振りをして、タラップを降りた。ドアが閉まるか閉まらないかのところで、バスは乱暴に走り去つていった。

降車させられた道のわきには、簡単な風除けとバス停であることを示す標識があつたが、時刻表はなく、そもそもこの国で乗り物に時間通りの運行を求めるのはばかり話だと、ここ数日でわかつっていたので特に落胆することはない。ただここがどこかわからないのには困つた。頬みの綱のタブレットも、あいにく電池切れだ。

幸いハンドレッドパワーがあるし、跳ぶのもありだけは思うのだが、なにぶん目的地までの距離がわからぬから無駄打ちはできない。とりあえず歩くしかない、ということに気がついて、僕はしばらく呆然とした。

目の前にはただひたすら地平へ向かって延びる道があり、終わりは見えなかつた。黄色のレンガの道な

らエメラルドの街に続くけれど、熱した鉄板のように足裏を炙るひび割れたアスファルトの車道は、一体どこへ繋がつているのだろう。おまけに靴は魔法使いから手入れたのでも、銀色でもない、ただの砂色をしたショートブーツだ。

よく履いていたロングブーツは旅向きではないので、スースикиースと一緒に自宅へ送つた。不在中はハウスキーパーを週に一度頼んであるから、受け取つてシユーズボックスにしまつてくれていると思う。

スーツケースはこのあたりに多い石畳を転がすのは邪魔なので、大きめのバックパックを買つた。レッドとブラックのツートン。洋服も減らせるだけ減らして、ボトムス三本と長袖のシャツが二枚、Tシャツが六枚。持ち歩いているボトルのシャンプーでみんな一緒に洗う。ずいぶん身軽になつたものだ。

さつき横を追い抜いていつた白い軽トラックが、土ぼこりを立てながら反対の路線を戻つてきたと思つた。